広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第56号　2007　27－33

ハイランダー・フォークスクールとアメリカの労働運動

― 産業別組織会議（CIO）との関係を中心に ―

藤　村　好　美

（2007年10月４日受理）

Highlander Folk School and the Southern Labor Movement in the United States
― Focusing on its relationship with CIO(Congress of Industrial Organizations) ―

Yoshimi Fujimura

Abstract. Highlander Folk School (HFS) was founded in 1932 in Monteagle, Tennessee by Myles Horton and Don West. One of its founders, Myles Horton was a pioneer in the cause of social justice in the Southern Region of America and is called "the Giant of adult education movement in the United States." Since its foundation, HFS was dedicated to teaching blacks and whites to challenge entrenched social, economic and political strictures of a segregated society. In the 1930s and 1940s, it developed labor education throughout the southern region in cooperation with CIO(the Congress of Industrial Organizations). This paper examines the role of HFS in the labor movement in the South and its relationship with CIO.

Key words: Highlander Folk School, Myles Horton, organizing, CIO, labor education
キーワード：ハイランダー・フォークスクール，マイルズ・ホートン，組織化，CIO，労働者教育

はじめに

アメリカの成人教育史に名を残すハイランダー・フォークスクール（Highlander Folk School，以下本稿ではHFSと略記）は，1932年11月，テネシー州モンティーグルに，マイルズ・ホートンとダン・ウェストによって設立され，1961年まで30年近くにわたり，アメリカ南部の民衆の学びと社会運動に大きく寄与してきた。その後，反共政策をとるテネシー州当局との軋轢のために1961年に閉校を余儀なくされた後も，ハイランダー研究教育センターとして，移転先のテネシー州ノックスビルにおいて，環境問題や移民をめぐる問題など，アメリカ社会やひいては世界の抱える現代的課題に果敢に挑戦しつづけ，成人教育の世界的連帯の一大潮流を担っている[1)]。フォークスクールから研究教育センターの時代を通じて，一貫してハイランダーの活動を支える理念は，端的に言えば，民衆のエンパワーメントと社会変革であり，それは，創設者のひとりであるマイルズ・ホートンの成人教育思想に他ならない[2)]。

HFSにおける実践は，1930年代から1940年代にかけての南部労働者の組織化とCIOを中心とする労働運動との関わりの時期から，1940年代から1950年代にかけての南部の人種隔離政策との闘いの時期を経て，1950年代から1960年代にかけてのシチズンシップ・スクールにおける識字実践に至る公民権運動との深い関わりの時期に大別することができる[3)]。本稿では，設立初期のHFSにおける労働者教育について，その実践とCIOとの関係の変遷を中心に追求していきたい。まず１において，HFSの当初の設立の目的が労働者のリーダー養成であったことを，その設立趣意書から確認する。次に２において，ホートンに労働者教育の必要性を痛感させた出来事であるワイルダーのストライキとその悲劇について，ホートンの自伝等をもとに明らかにする。そして３において，HFSとCIOが協力関係にあった時期におけるHFSの労働者教育実践について概観し，最後に，HFSの労働運動との関わりが，次の公民権運動に関連したHFSの一連の実践にどの

ように継承されたかを問題提起し，まとめに代えたい。

1　設立趣意書に見るHFSのミッション

ハイランダー・フォークスクールの設立にあたっては，ホートンのユニオン神学大学院時代の師である新正当派神学者のラインホールド・ニーバーの影響と尽力が大きい[4]。ニーバーは，1961年11月の開校に先立ち，仮称「南部山岳学校」の設立と運営のための募金活動のために，次のような趣意書を署名入りでしたためている。ハイランダーのミッションを理解する上で重要な文書であるので，以下に全文を紹介する[5]。

南　部　山　岳　学　校
臨時の住所
410号室
ヴァンダービルド通り52
ニューヨーク市
ディレクター
マイルズ・F・ホートン
1932年５月27日

拝啓，労働者のリーダーシップとその効果的な実践についに関心がある方々に最適な教育プロジェクトについてお知らせ致したく，お便りを差し上げます。
私たちのプロジェクトは，南部工業地域の労働者リーダーの養成のための「南部山岳学校」を組織することです。炭鉱や繊維産業に駆り出される南部山岳地帯の住民は，そういった産業の問題点や組合活動の重要性について全く理解していません。AFLも共産主義者も，彼らの要求には的確に答えていません。私たちは，政治的かつ組合全体の戦略の必要性を理解するラディカルな労働者のリーダーを養成したいと考えています。地域にリーダーがいなければ，南部の労働運動は不可能です。山岳地域の人びとはその閉鎖性のゆえ，地域外からくるリーダーを受け入れることを嫌うため，人びとの中からリーダーを養成することが重要なことは明らかです。私たちはできるだけ広範囲の教育プログラムを設定し，地域の人びとに現代社会の問題をトータルに提示するつもりです。

当初の予算は少なめにして，3,000ドルから開始する所存です。学校の責任者には，私たちが最も信頼をおく若者を指名致します。彼の名前はマイルズ・ホートンと言い，彼は長年にわたりこの目的のために準備をしてまいりました。昨年１年間，彼はデンマークの民衆学校の教育方法を学習してまいりました。ホートン氏自身，南部の出身であるため，南部の人びとの望むことはよく知っております。

南部山岳学校の組織は，デンマークのフォークハイスクールと同様のものと致します。18歳くらいの若い労働者を少人数のグループとし，彼らは小さな農場で教師と寝食を共にし，働き，学び，討論します。人間関係が重要なのです。通常の授業時間は限られていますが，学生達は仲間の学生の要求に基づいた作業を通じて学ぶことができます。しかし地域の大人たちと行う教育的実践のほうが，学校そのものより重要です。本校の目的は，ここで学ぶ機会を得なければ学習する機会を得られないであろう人びとが，自分たちや社会について学習し，地域や職場で遭遇する問題に対処する能力を身につけることを手助けすることです。

プロジェクトの詳細な場所はまもなく決定しますが，ノース・カロライナの山間部を予定しています。小さな農場を購入するため，および必要な設備と教科書，教師の食事代のための資金が必要です。関係者は誰も報酬を得ることはありません。地域の人びとが労働や食糧を提供してくれれば，１年目は3,000ドルあればまかなうことが可能でしょう。年を経ると共に，学校の自立性を高めるつもりです。

私たちは，教育を新しい社会秩序を確立するための手段とすることを提案します。個人は諸問題と関わることで，個人と新しい環境，そして社会主義的な社会がひとつとなるのです。

私たちは，ラディカルな労働者のリーダーを養成する必要性に共感する人びとに，年に５ドルから100ドルの支援をお願いしたいのです。私たちのプロジェクトに賛同していただけるようなら，財務担当のニューヨーク市，ヴァンダービルド通り52，明日の世界のA・アルバート・マックリード氏宛にご送金いただけますでしょうか。

その他のこのプロジェクトの後援者であり，ホートン氏の相談者である者は，以下のとおりです。

シャーウッド・エディ
ノーマン・トーマス
アーサー・L・スウィフツ
ジョージ・S・カウンツ

敬具
ラインホールド・ニーバー

この趣意書にあるように，HFSの目的はラディカルな労働者のリーダーを養成することとされている。

この「ラディカルな」という文言は，当時のニーバーが，大恐慌下のデトロイトの自動車産業に携わる労働者の悲惨な生活を目の当たりにして，伝統的なキリスト教リベラリズムに失望し，社会主義，さらにはマルクシズムに傾倒していたことと大きく関係している[6]。しかし，

ホートン自身が労働運動と労働者教育の切実さに開眼するのは，次にあげる事件まで待たなければならない。

2　ワイルダー・ストライキとホートンの労働運動への開眼

ハイランダー・フォークスクールが開校した頃と時を同じくして，テネシー州カンバーランド台地にあるワイルダーでは，炭鉱のストライキが危機的状況になっていた。そして，そのストライキにホートンも少なからず関わりを持っていったのである[7]。

産業革命以降，蒸気機関の動力としての石炭に対する需要は世界的に高まっていった。さらに石炭は，町の建設に欠かせないレンガを焼くためにも使われた。第二次世界大戦終結の頃まで，石炭は国の主要なエネルギー源であり，実際1850年から1890年の間，アメリカにおける石炭の需要は10年ごとに倍増の一途をたどった。そしてアパラチア地域は，アメリカの無煙炭の８割を産出して，まさに「国家の石炭庫」[8]という存在となった。

アパラチア地域における問題は，輸送の手段と労働力の確保であった。鉄道が完備せず峡谷が多いこの地域においては，豊富な労働力は不可欠であった。石炭会社にとってその解決策は，町を「企業城下町」とすることであった。つまり，労働者を町ごと抱え込むことで，労働力を安定的に確保しようとしたのである。至る所に「企業城下町」が建設されたが，テネシー州ワイルダーも，20世紀初頭にジョン・T・ワイルダーが土地を購入して作り出した炭鉱の町であった。ワイルダーの周辺には，その他，クローフォード，トウィントン，デビッドソンといった町が形成されていった。企業城下町では，売店，理髪店，医院，住宅，教会，郵便局が企業の手によって提供され，労働者はわずかな給料からそれらの使用料を天引きされるのが常であった。売店で売られる日用品は，通常の値段の数倍で売られたが，労働者はそれを買うしか方途がなかった。

1930年代のワイルダーの人口は約1,500人で，炭鉱労働者は農業や林業よりも安定した職業を求めて周辺の地域から集まって来た男性がほとんどであった。彼らはほとんど教育を受ける機会を持たず，学校には数ヶ月しか通ったことがないものが多かったという。第一次世界大戦で石炭ブームにわいた頃は，ワイルダーを含む各地で組合が結成され，労働者の生活も改善されたが，大恐慌を境に，組合は次々と姿を消していった。ワイルダーでも，1924年に組合が閉鎖されて以降1931年まで組合はひとつも存在しない状況であった。その後，大恐慌による不景気のため給料がカットされ，苦しい生活を余儀なくされるにつて，労働者は密かに組合を結成する動きに出たが，これに対し，ワイルダー，クローフォード，デビッドソンの石炭会社各社は協力して，労働者が組合を離脱するまで炭鉱を閉鎖するという対抗策に打って出た。しかしここで，ワイルダーの２つの石炭会社が足並みを乱し，組合の存在を認めて，建前上は賃金カットはしないという契約を組合と結んだ。こうして炭鉱労働者組合が再結成されたのである。

ところが大恐慌による不況は，炭鉱の状況を次第に悪化させていった。石炭会社による炭鉱の閉鎖や賃金のカットは，炭鉱労働者を飢え死に同然の状態にまで追い込んでいった。組合はフェントレス石炭コークス社による20％の賃金カットと組合直営売店の廃止という提案を拒否し，リーダーのバーニー・グラハムのもと，１年間のストライキに打って出た。1932年７月のことである。これにより炭鉱は1932年10月まで閉鎖されたが，その後，武器をもった見張りのもとで非組合員の労働者が炭鉱に入るという緊迫した状況の中で作業が再開した。

1932年11月，マイルズ・ホートンがワイルダーのバーニー・グラハムのもとを訪れ，ワイルダーの悲惨な状況を目の当たりにする。ところが彼は，翌日バスを待っているところを，「情報を集めて戻り，それを人に伝えた」[9]という容疑で逮捕されてしまう[10]。翌朝保釈されるやいなや，彼はストライキを支持するキャンペーンを開始する。その活動の中で彼は，組合のリーダーのグラハムの命が危険にさらされていることを知る。事態はまさに緊迫していたのである。ホートンは当時の状況について，自伝の中で次のように述べている。

> ４年後の1933年，私は，テネシー州ワイルダーのストライキに巻き込まれる。そこで，私はワイルダー炭鉱労働者組合の理事長であるバーニー・グラハムが殺害の危険にさらされていることを知る。私は彼の親友であり，彼の命を助ける方途を探った。私は考えられることは全て行った。新聞に広告を出し，牧師に相談し，テネシー州知事を駆り出した。しかし，プロの殺し屋たちがバーニー・グラハムを殺すのを阻止させるよう彼らを説得することはできなかった。同じ殺し屋たちがイリノイ州での労働争議に関係した11人を殺したという証拠をもってしても，無理だった。私は彼らの写真も持っていたし，彼らの素性も知っていた。しかしグラハム殺しを阻止することはできなかった。バーニーは頑固な山の組合

理事長で，自分が殺されそうであることを知っていた。当時，彼のような人物にはその危険があったのである。組合員たちも，彼の命が危険にさらされていることを知っていて，何かしなければならないと思っていた。私の作戦がすべて失敗に終わってしまうと，彼らは私にこう言った。「もし私たちが殺し屋たちを殺さなければ，バーニーは殺されてしまう。」私もそれを否定することはできなかった。それから彼らは私に問いかけた。「私たちの方が彼らを殺さなければならないとは思いませんか。」[11)]

この緊迫した状況の中で，ホートンの気持ちはいかばかりであったろうか。結局，バーニーは拉致され，殺害されてしまう。ホートンはそれを知り，気絶する。正義を追求する者が，力でねじ伏されてしまうというやりきれない時代。さらに同じような状況は，20数年後の公民権運動の時代にも繰り返されるのだった。ホートンはこの事件をきっかけに，自分がラディカルになったのだと，次のように回想している。

私たちはバーニーに，彼に身の危険が迫っていることを告げた。（略）

（バーニーを助けることについて）私は，誰を動かすこともできなかった。

そのことは，私を殺した。私はそのことで殺されたのだ。このようなことは，まさに心に傷を負わせる経験である。人が死ぬという状況に巻き込まれて，それが確実に起こるのだということを知っていながら，何もすることができない。社会は残酷すぎる。私がそれまでラディカルな人物ではなかったとしても，私はこの出来事をきっかけにラディカルになった。このようなことが起こって，ラディカルにならないでいられようか[12)]。

バーニーの暗殺の後も，ワイルダーの炭鉱労働者をめぐる悲惨な状況は改善されなかった。1933年６月，チャタヌーガ・タイムズ紙は，血塗られたワイルダーは，ぼろぼろのワイルダーであり，飢えに苦しむワイルダーであり，絶望的なワイルダーであると報じ，地域住民に対する援助の必要性を説いた。その夏，ホートンも炭鉱の保全に取り組むべくワイルダーを訪れている。しかしストライキの傷跡は大きく，多くの炭鉱は閉鎖され，組合に所属しない労働者が，低賃金で細々と残った炭鉱で働くだけだった。人びとの生活はまさに飢えと紙一重の状況であり，ワイルダーの炭鉱産業は壊滅的打撃を受けていた。連邦政府は，ワイルダーの炭鉱の閉鎖を宣言し，住民はTVA（テネシー川流域開発公社）から住居と仕事を提供されることとなった。

ホートンにとって認めがたいことではあったが，ワイルダーの労働運動は失敗に終わった。このワイルダーの事件をきっかけに，ホートンは労働者教育の必要性を痛感する。スミスは，ワイルダーの事件をHFSにとっての転機であると位置づけている。1930年代，HFSは労働者教育プログラムを展開するが，HFSのスタッフも参加者も，労働争議における新聞，教会，社会運動家，政府職員の役割の重要さを自覚したのである。以後HFSは，労働者教育プログラムに，労働組合員を対象とした労使折衝の方法や組合の運営方法などの実践的な内容を盛り込むこととなる[13)]。

3　CIO（産業別組織会議）との協力関係の成立

長沼秀世によれば，1920年代までのアメリカの労働組合の主力は，連合体であるAFL（アメリカ労働総同盟）に参加しており，その多くは職能別組合であった。1930年代，ニューディールの主要政策として，全国産業復興法およびワグナー法により，労働者の団結権，団体交渉権が認められると，全国各地の労働者たちの中に，労働組合への参加を欲する気運が生まれてきた。そして彼らの中に，少数派ではあるが，産業別組合の原理を認めることを主張する勢力が生まれ，AFLの主流派と組織原理をめぐる対立が明確となっていった。1935年，少数派は産業別組織委員会（Committee for Industrial Organization, CIO）を組織し，ついにAFLとたもとを分かつこととなった。同委員会は，その後多くの組合の参加を得，1938年，産業別組織会議（Congress of Industrial Organizations, CIO）に発展したのである[14)]。

1937年３月，CIOは繊維労働者組織委員会（Textile Workers Organizing Committee, TWOC）を設け，繊維労働者が多い南部で，本格的な組織活動を展開することとなった[15)]。これがHFSとCIOの協同関係のスタートとなる。グレンによれば，その経緯は次の通りである。

1937年３月，CIOの首脳陣が繊維労働者組織委員会の設置を表明すると，ハイランダーのスタッフは「南部の労働運動史の中で最も重要な出来事」（ジェイムス・ダンブロウスキーの言葉）に参画するチャンスを前に喜びのあまり飛び上がった。南部の繊維産業を組織化しようとするTWOCの動きのもたらす効果はまさに絶大であることが，予測できた。1937年現在，繊維産業に従事する者の数は100万人

で，南部だけでも約45万人を数えた。CIO のキャンペーンが成功すれば，アメリカ最大の労働組合が誕生することとなる。また，繊維産業という南部賃金労働者の最大の雇用者の組織化は，産業の組合活動の成否の鍵を握るだけでなく，南部の経済的政治的転換の鍵でもあった。ダンブロウスキーは，ハイランダーが南部の労働者学校となるという目標を実現するためには，TWOC のキャンペーンに完全に参画することが不可欠であると考えた。これには，他のハイランダーのスタッフも同意した。マイルズ・ホートンにとって，TWOC のキャンペーンは真の「労働運動」の始まりを告げるシグナルであった。すなわちそれは，全ての南部の労働者たちに経済的恩恵を約束し，政治的活動と教育を用いて彼らの生活を向上させる「民主的で，ラディカルな，社会運動」に他ならなかった[16]。

HFS は CIO の繊維労働者の組織活動にかかわっていった。その際 HFS は，労働運動のリーダーを養成するだけでなく，実際にホートンを始めスタッフが組合活動に参加して活動の一翼を担うというスタンスをとった[17]。ホートンは，自伝の中で，サウスカロライナ州マッコールにおける自らの体験を例にあげ，当時のエピソードを次のように語っている。

1937年，私は繊維労働者組織委員会（TWOC）のために，ノースカロライナとサウスカロライナの繊維労働者の組合の組織化を行った。そこでは，黒人，白人，ネイティブ・アメリカンといった人びとが，工場主によって搾取されていたのである。ある日ひとりの労働者が私に，サウスカロライナ州マッコールの繊維工場の組合の組織化を手助けしてほしいと言ってきた。例えば人が地図を指さして，「ここは最悪の場所です。ここの人びとに対する処遇は劣悪で，他のどの場所よりもここが助けを必要としていて，組織化が必要なのです」と言ったとしても，きっかけも何もない所で支援するのは難しい。しかしそこに火の粉があるのなら，支援者はそこに出かけていって，火の粉を吹いて火をおこすことができる。マッコールの繊維工場の労働者たちは，自らの行動に賭けてみようという気持ちを，他の工場の労働者たちよりも，ほんの少し多く持っていた。彼らは最低賃金で働いていたわけでもないし，白人の賃金の半額で最も下の仕事をする黒人やネイティブ・アメリカンであったわけでもない。彼らは機械工や織工などの半熟練工であり，その気があれば他の仕事をみつけることのできる人たちであった。彼らは元来，自尊心をもっていた。彼らは自分たちが搾取されていることを自覚し，それに憤慨していた。このような人びとこそ，組織化の対象なのである。このような人びとを探し，組合の中にみつけるのだ。技能もなく最低賃金で働く人びとは，このような（半熟練の）人びとの後についていくだろう。しかし，組織化の対象となるのは，そのような最底辺の人びとではなく，生活の手段を有し，自尊心があり，他の労働者の組織化を手助けできる人びとなのである[18]。

こうして，ホートンは組合活動に参加し，黒人と白人を同じひとつの組合に加入させ，経営者との賃金交渉に際して，それまで行われていた人種による差別に，次のように真っ向から立ち向かったのである。なおこの賃金交渉には，彼は単独で出かけたのではなく，他の組合員も同伴している。

私は言った。「彼ら（黒人）は，白人労働者の半分の賃金しかもらっていません。契約書には，皆が最低賃金を受け取れると書いてあります。ということは，黒人は現在の賃金の倍額を受け取れることになります。彼らの賃金は100％増額になるということですね。」すると彼（経営者）は，飛び上がって言った。「何だって。契約書は黒人については述べていないよ。」そこで，私はたたみかけた。「いいえ，今話しているのは，すべての組合員のことなのです。黒人も同じ組合に入っているのです。皆同じ組合員です。」彼は答えた。「黒人にも通用するって？もし私が白人と同じだけの賃金を黒人に払わなければならないなら，黒人を首にするしかないね。」そこで私はこう反撃した。「ひとりでも首にすれば，この工場は動かなくなる。あなたはひとりだって解雇することはできないのです。」この言葉を聞いて，彼は心臓麻痺を起こしてしまった。恐ろしいことだった。私たちは彼が死んでしまったと思い，事務所から逃げ去った。後でわかったことだが，現場監督が救急車を呼び，彼を病院まで連れて行って，命に別状はなかったそうである[19]。

このように，ホートンは労使交渉を行いながら，同席した他の組合員に交渉の方法を実践をもって教えていた。組合活動の実践が，同時に労働者教育の場でもあったのである。さらにホートンは次のように，白人の組合員と黒人の組合員が一緒に組合活動を行うように働きかけた。これは，教会から学校，食堂まで，生活の隅々に人種隔離政策が行き渡っていて，KKK のような過激な人種隔離主義者が大手を振っていた当時

の南部社会においては，衝撃的なことであり，危険なことであった。なお，当時の労働者教育を受けた者の中から，後に公民権運動のリーダーも多く生まれている[20]。

私たちの次の仕事は，皆が一堂に会して学ぶことであった。それに適した広い場所といったら，白人専用の公立小学校しかなかった。黒人が参加するなら，その小学校を使うことはできないと言われていた。私はこう告げられた。「法律違反なんですよ。あなただって白人なんだから，それが違法だということは知っているでしょう。」

そう。そこは，ノースカロライナ州マッコールだった。毎週クラン（KKK）の会合が開かれていて，夜間は外出禁止の地だった。笛がなったら黒人は一目散で逃げなければならず，逃げ遅れれば捕まってしまうような土地だった。私は言った。「ええ，知ってます。でも，集まる場所が必要なんです。学校の講堂がいいと思います。」彼らは尋ねた。「誰が許可するというのですか。」私は続けた。「許可なしで集会を持つしかない。（略）もしドアの鍵を開けてくれなければ，こちらはドアを壊して開ける覚悟があります。」[21]

こうして，強引にもホートンは白人専用の小学校で，黒人と白人を交えた労働組合の集会を実現したのである。しかし，世間の風当たりは強かった。当時の南部は全て隔離政策の秩序のもとに動いていた。組合員は日常生活の中で，様々な軋轢を避けることは不可能だった。そしてこの軋轢は，1950年代から1960年代にかけての公民権運動のエネルギーとしてくすぶり続けたに相違ない。

この後，上の事例であげたTWOCをはじめとして，CIOの様々な組合がHFSに教育活動を頼むようになってきた。この時期のHFSは，まさにCIOの労働者学校であったということもできよう。長沼秀世によれば，1937年から1945年まで南部全域において，CIOの活動家1万人がHFSの構外教育を受けたと言われている。この間，CIOは南部において公称40万人の労働者を組織した。1937年から以後10年間のHFSの収入およびスタッフの活動の9割がCIO系組合のための教育にあてられたと言われている[22]。

まとめに代えて

1937年から1945年までのHFSは，CIOの学校ともいえるほど，CIOとの強い協力関係にあった。その関係がHFSとCIOとの協働にまで進展した例として1944年から数年間開かれた「南部CIO学校」がある。これは1943年に開かれたCIO全国大会において，南部各地区の委員長らによって提唱されたもので，一ヶ月に及びCIO中堅役員の長期滞在研修をHFSで行うというものであった。CIOはこのプログラムの計画作成の段階から参加し，以後HFSの理事会に多くのCIO南部地区委員長が加わるなど，この時期のHFSはCIOの付属機関になったかのような観すらある[23]。

しかし，第二次世界大戦を境に，HFSとCIOの関係は次第に変化し，最後には断絶することとなる。その経緯についての考察は，別の機会に譲るが，端的に言えば，HFSはCIOの付属学校的性格から抜け出て，再び新たな独自の道を歩み始めた，と評価することができよう。HFSの労働者教育の遺産は，着実に後の公民権運動へと引き継がれていった。これは，HFSで労働者教育を受けた者の中から，公民権運動のリーダーが生まれたことや，黒人と白人の人種隔離政策克服の芽生えが，南部CIO学校の実践にあったことなどを見ても明らかである[24]。HFSは，各時代の要求に応えながら，常に社会正義の実現を目指す社会変革の民衆学校であり続けたのである。

【注・引用文献】

1）藤村好美「社会変革の成人教育の世界的連帯」日本社会教育学会編『グローバリゼーションと社会教育・生涯学習』東洋館，2005年，88-99頁。

2）マイルズ・ホートンに関しては，藤村好美「マイルズ・ホートンの成人教育理念の形成－ニーバーのキリスト教社会主義思想の影響について－」『日本社会教育学会紀要』No.33，1997年，45-53頁，Frank Adams, *Unearthing Seeds of Fire: The Idea of Highlander*, North Carolina, Winston-Salem, 1975, 他，多数の論考がある。

3）HFSに関しては，Aimee Isgrig Horton, *The Highlander Folk School: a History of Its Major Programs 1932-1961*, New York, Carlton Publishing Inc., 1989, John M. Glen, *Highlander: No Ordinary School 1932-1962*, Lexington, the University Press of Kentucky, 1988, 他を参照。

4）チャールズ・C・ブラウン著，高橋義文訳『ニーバーとその時代－ラインホールド・ニーバーの預言者的役割とその遺産－』聖学院大学出版会，2004年，他。ラインホールド・ニーバー（Reinhold Niebuhr）は，20世紀アメリカが生んだ最も偉大なキリスト教神学者であり，その影響力は，アメリカの神学界の

みならず，社会哲学から政治，経済まで広範に及ぶ。彼は，ホートンの成人教育実践に関して，多大な思想的影響と原動力，そして支援を与えた人物である。

5）Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *The Long Haul: an Autobiography*, New York, Teachers College Press, 1998, pp.61-62.

6）ニーバーは，1928年にデトロイトからニューヨークに移り，ニューヨークのユニオン神学大学院で「キリスト教倫理学」の教鞭をとり，1932年には *Moral Man and Immoral Society* を脱稿している。この頃がニーバーが最もラディカルな思想を抱いていた時期であり，それはホートンがニーバーの教えを受けた時期と重なる。その後，ニーバーはマルクシズムにも失望し，自由主義神学のキリスト教現実主義を標榜し，戦中から戦後1960年代頃まで，アメリカの政界に大きな思想的影響を与えることとなる。これについては，鈴木有郷『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』新教出版社，1998年，Elizabeth Sifton, *the Serenity Prayer: Faith and Politics in Times of Peace and War*, W. W. Norton & Company, New York, 2003，Reinhold Niebuhr, *the Nature and Destiny of Man: a Christian Interpretation, Volume I & II*, Westminster John Knox Press, Lousville, 1943, 他を参照。

7）以後の記述に関しては，Angela Smith, "Myles Horton, Highlander Folk School, and the Wilder Coal Strike of 1932", 2003を参照。

8）Crandall A. Shifflett, *Coal Towns: Life, Work, and Culture in Company Towns of Southern Apparachia 1880-1960*, Knoxville, University of Tennessee Press, 1991, p.30.

9）Horton to Tennessee Newspapers, Nov 28, 1932, HC Papers, Box 76.

10）John M. Gren, *op. cit.*, pp.21-46.

11）Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *op. cit.*, pp.39-41.

12）Fran Ansley & Barbara Bell, "No Moanin': Voices of Southern Struggle", *Southern Exposure 1*, 1974, pp.112-142.

13）Angela Smith, *op. cit.*, p. 21.

14）アメリカの労働運動と CIO の歴史に関しては，長沼秀世『アメリカの社会運動－CIO 史の研究－』彩流社，2004年を参照。

15）これは，後の繊維組合（Textile Workers Union, TWU）である。

16）John M. Gren, *op. cit.*, p.70.

17）HFS の教育方法については，藤村好美「成人教育における実践と研究の統合－ハイランダーの実践に見る参与研究の可能性－」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部（教育人間科学関連領域）』2006年を参照されたい。

18）Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *op.cit.*, pp.88-89.

19）*Ibid.*, pp.90-91.

20）*Ibid.*, p.93.

21）*Ibid.*

22）長沼秀世，前掲書，408-409頁。

23）同上，409-410頁。

24）同上，410頁。